

英知通信



昭和49年7月5日

英知大学

No.10

入学おめでとう

きょうこの講堂におきまして、二百四十名に上る新入生の皆さんをお迎えし、多数のご父兄の方々のご出席を頂き、教職員及び在学生の皆さんと共に昭和四十九年度英知大学の入学式を挙行いたしますことは、私の大きな喜びであります。私はここに本大学を代表し、新入生の皆さんとご父兄の方々に対しまして、心よりお祝い申し上げます。

皆さんの入学された今年には国際的に政治及び経済の変動の大きな年であらうと思われまふ。昨年の石油危機以来全世界的にインフレーション

大学の理念

大学の起源は御承知の様に、ヨーロッパ中世の普通の学校 Studium Generale であります。今日大学を意味するユニバーシティの原語であるラテン語の Universitas は教授と学生の共同を意味すると共にいろいろな学術の総合、世界観の統一を意味するものであります。こんにち、大学はすべての人に開かれていくという意味において普遍的なものであることにおいて普遍的でなければならず、単なる研究を追求するのみではなく、人間の形成を求めるといふ意

英知を求めて

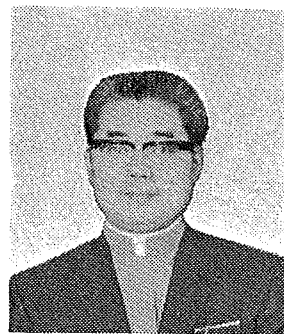
学長 岸英司

が進み、これから私たちの生活はどうかになってゆくのか不明な事が多く、一応平静さを保っているとはいえない不安な毎日ではなからうかと存じます。このような時に四年間の大学生活はどのような意味をもつのでありましょうか、また四年間に神学とか文学を学ぶ意味はどこにあるのか、このような問いかけは皆さんひとりひとりが答えなければならぬ問題であります。私はきょうの入学式にあたり、この様な問いを考えながら、大学及びカトリック大学の理念と大学創立の精神についてお話ししたいと思います。

味において、ある種の生命共同体的社会なのであります。大学の特色は人間の形成がいろいろな学術の研究を通してなされることとあります。この点こそ、大学が単なる研究機関および他のすべての教育機関又は他の社会と異なる所と言えましょう。従っていろいろな学術の研究がなされる大学というのはいかにないかと共に人間の形成がめざされたい大学もありません。さていろいろな学術の研究の目ざすものは何でありましょうか。勿論それは真理であります。真理にはいろいろな真理があり、単に科学的真理

のみが真理であるのではなく、哲学的真理とか宗教的真理とかよばれるものも実は真理なのであります。科学的真理は真理のごく一面にしかすぎません。そしてあらゆる学術の追求する真理も真理そのものの一端を示すものでしかありません。真理の完き姿は人間には常にかくされたものであり、そこには永遠の追求が存在するのであります。

完き真理、永遠なる真理の存在を前提としてこそ、いろいろな学術の追求は意味をもち、大学は存在理由をもつのであります。従って大学における皆さんの勉学と研究は、実際的なものであり、身近なものであつて



も、それらはすべて永遠なるものを目指し、それに秩序づけられたものなのであります。

さてご承知の様に英知大学はアメリカ、カナダに幾多の姉妹校をもつカトリック大学であります。昨年はいこれらの大学のひとつカナダのウィニペグ大学の College de St. Boniface にフランス文学科の女子学生が一名留学致しました。彼女はこの幸せな毎日について、屢々手紙を送ってまいります。誰でも個人として語学と学費さえあれば、アメリカ、カナダの大学あるいはヨーロッパの大学に留学可能でありましょうが、しかも

なお姉妹への留学の持つ意味は同じ理念に基づくカトリック大学で学ぶことが出来、そして、親身になって世話してくれるということなのであります。留学のために必要な第一のことは卓越せる語学力でありまして、留学をめざされる方はこのことをご記憶願いたいと存じます。

カトリック大学の理念

さてカトリック大学とは先に述べました、完き真理の存在を前提とする大学の理念に何か特別なものをつけ加えるのでありましょうか。この点におきましてカトリック大学は特別なものをつけ加えるのではなく、むしろ、ただ完き真理、永遠なる真理を人格的表現である神の御名において肯定するだけあります。カトリック大学においては永遠なる真理、究極的実在は神であり、人間は神より出で神に帰る存在として、神以外の一切のものにれいぞくすることなき真に自由なる人間の形成を目的とするのであります。真に自由なる人間とは完き真理なる神によって生かされた人間の事でありまふ。

大学の使命は単なる一社会とか一国家のためのみ限定されません。それは最も普遍的なる真実の人間の育成であります。今日の宇宙時代において、地球は太陽系における一つの惑星に過ぎずこの地球上における全人類は一つの家族であり、人間は真実に人となることに目ざめるべきであります。この目ざめた人こそ、仏教においては覚者、仏とよばれキリスト教においては信仰の人とよばれるのであります。真に目ざめた人間こそ、今日の社会、国家、世界を生

かす事が出来るると私は確信しております。

大学創立の精神

最後に英知大学創立の精神に一言ふれたいと存じます。英知大学がその名称として選んだ英知は例え「人類の英知」といった今日の流行語であります。英知はもともと深い意味を荷ったものであります。すなわちキリスト教においては英知は聖霊の賜の一つであり、これは神から来る知恵であり、単なる知識を意味しないのであります。知識なくして人間

山崎正雄教授観桜会に参列

—内閣総理大臣田中角栄氏の特別招待より—

昨年春、政府から勲三等旭日中綬章を授けられた、本学文学部長兼英文学科長山崎正雄教授は、美香夫人とともに去る四月十七日、午前九時半より正午まで新宿御苑において開かれた観桜会に臨まれた。

これは、内閣総理大臣田中角栄氏の特別招待によるものであって見事に咲いた新宿御苑の八重桜のもとには、当日、田中角栄氏の令嬢をはじめ、三木副総理夫妻、大平外相、二階堂官房長官ら政府関係者が列席し、招かれた功労者たちひとりひとりに握手をかわしていた。好天に恵まれた会場では、ピフェ・スタイルによる昼食会が行われ、山崎教授ご夫妻は、同じく受賞された三高時代より親友中西信太郎教授(甲南女子大学)ご夫妻とともに、記念すべき一時を過ごされた。

は生きることが出来ませんが、知識だけでは人間は憩うことができません。人間の知識の憩う所—それは英知であります。一切の知識の基であります。東洋でも西洋でも、人間は常にこの人間の行く手を照らす光なるもの英知を求めて生きてきたのでありまして、英知大学はこの知恵に導かれながらこの知恵を見出すべく、この英知—サビエンチアを創立の精神としております。

人事

○新任 四月一日付

英文学科	教授	湯次	了豊
同	講師	トマス・モリソン	
同	助手	谷真嗣	
フランス文学科	講師	デ・スカン	フレール
一般教養	教授	楠瀬	正致
○短大廃止に伴う大学への新任			
神学科	教授	壺内	弘吉
同	助教授	西尾	正二
同	助教授	高野	利雄
同	講師	高野	利雄
同	講師	高野	利雄
同	講師	高野	利雄
同	講師	高野	利雄
○昇任			
神学科	助教授	和田	幹男
英文学科	教授	中園	安四郎
同	教授	佐伯	わか子
同	助教授	小林	わか子
イスパニア文学科	教授	興津	健作
フランス文学科	助教授	前田	健助
一般教養	教授	西山	俊彦

す。皆さんが校門をはいられて新館の西側の壁に仰ぎみる聖母子像の足下にかげられたラテン語の *Sedes Sapientiae* とはそのような意味なありまして、皆さんはこれから毎日この *Sedes Sapientiae* を仰ぎみながら、皆さんの大学生活をはじめられるのであります。私はきょう入学された皆さんがこれからは英知大学の一員として、この英知を求めながら、変動する社会と世界の中でこの四年間を皆さんの勉学と研究を通して永遠なる真理の探求に捧げられる様祈つてやみません。ご父兄の方

神学科長にベーク教授任命

長年にわたって神学科長を勤めた林篤教授の辞任にともない、大学当局は四月一日付でベーク教授を神学科長に任命した。ゲッレルト・ベーク教授はハンガリアの出身のイエズス会司祭。マーストリヒト大学より神学修士を、インスブルグ大学院より哲学博士の学位を受けている。昭和三十年来日。昭和四十四年より本学神学科で神学を教えている。

研究室便り

○アルバレス教授 (イスパニア文学) は、「日本キリスト教に關するフランシスコ会の資料、聖マルティ・デ・ラ・アセンシオンとマルセロ・デ・リブデネーラ修士に於ける報告 *Documentos Francis-Canos de la Cristiandad de Japon* と題する著書をイスパニア語にて出版した。アルバレス教授は、「このたびの出版は私にとって新大陸発見の気持に通ずるものがある。歴史家

々も皆さんの御子弟のきょうのこの出発の意味をよくご理解下さり、大と協力され、皆さんの御子弟がそれぞれその目的を達成される様努力されますようお願い致す次第であります。終りに入学式の祈りにもありまして、弱き私達すべての者の上に神の力強き助けと導きを祈りながら私の式辞といたします。(昭和四十九年四月十日)

佐伯わか子教授

(英米文学) は、名古屋大学の笠原嘉教授とともに、一月十日、みず書房より、「ハナ・グリーン著「手のことば」—韓者の一家の物語を翻訳出版した。この本は、未知の新しい世界、すなわち聞く能力をもつものから隔絶され、先天的理由で疎外の宿命のうちにおかれた、男女の韓者の世界を描いている。韓者の両親から生まれ、たひとりの娘は、聞こえる通常人であった。この韓者と通常人を含む三人の家族の五十年にわたる生活の物語であり、それは無関心と誤解し苦難にたいする長年のたたかいであった。またそれは、アメリカの市民階級の半世紀の生活史をめぐりに物語っている。

なお、佐伯教授が昭和四十六年十月にみず書房より翻訳出版された「ハナ・グリーン著「デボラの世界」は驚異的な好評を呼びついに第五版

英知短期大学宗教科
英知大学神学科へ発展的解消
昭和三十七年に創立されて今春第十二回卒業生を送り出した英知短期大学宗教科は、本年三月をもって解消、文学部神学科へ発展的に合流されることとなった。短大宗教科は修道会関係の要望にこたえて、カトリック神学および宗教全般について幅広い知識と調和のとれた一般教養科目を開講し、過去十二年間に一一八名を教える有為な人材を主としてカトリック・ミッション・スクールの教壇に送り出してきた。けれども最近入学志願がとみに減少し、このたび解消のやむなきに至ったわけである。このことは短大卒業生にとっては残念なことであるが、英知大学は短大生を含むすべての卒業生にとつていつまでもアルマ・マターとして存続することに変わりはない。

松本信愛講師

(倫理神学) から留学先のローマのコレジオ・サント・ピエトロより次の書簡が届いた「皆さんお元気ですか? 私もひさしぶりに「学生」に戻ってその特権と苦しみを味わっていますが、とても元気です。一九七四年に入ってからイタリアの郵便事情はますます悪くなり、最近では「運のいいもの」は一、二ヵ月かかって届き、「普通の郵便」は届きませんか? 受取った手紙には必ず返事を書くようにしています。(女子学生にだけ返事を書いてはいるではありません) ですから、手紙を出して返事を受取らなかった場合は再度挑戦して「運」をためてみて下さい。ではお互いに試験がうまくいきますように……」

試験がうまくいきますように……」

キーツ 雑感

真 嗣

(英文学科助手)

イギリスの劇作家・詩人・批評家
ベン・ジョンソンは短詩「短命」の
内で、「人を偉くするのは、木のよ
うに太くなることではない。三百年
に渡り一本の樺の木として立つこと
でもない。一本の樺もやがては丸太
となる。渴き葉もなく、ひからびて
―たまゆらの百合は、五月にはるか
に麗わしい。やがて夕に枯れ死んで
ゆく身ではあるが。百合は光りの
草、花であった。私は小さい中に本
当の美しさを見る。人生は短命故に
完全となる」と歌いました。この短
詩の中に美の司祭ジョン・キーツ(一
七九五―一八二二)の短かい一生
が見事に暗示されている様に思われ
ます。

一八一六年、キーツは友人クラ
クとジョージ・チャップマンのホ
マー訳を読み、深い感動を覚えまし
た。その感動は、「初めてチャッ
マンのホマー訳を詠みて」という
ソネットとなって表わされておりま
す。彼はこの詩の中で新しく詩人と
して出発する決意を語っているよう
に思われます。

その時わたしは、新しい星がその
視界を横切る時の夜空の観察者の
ように思えた。
鷺の目をもって太平洋を睨んだ
勇敢なコルテツのように―部下達
は皆途方もなく憶測をこらし、ダ
リアンの岬に声もなく互いに顔を
見合わせたように。

この詩に関してウオード女史が説

明しているように、岬の上に立つて
いるコルテツは、マーゲイトの懸崖
の上に立ち、海を眺め「ゆく末、越
し方」について考えているキーツの
姿であるようであります。この詩全
体は前の数週間の高まってゆく興奮
を示しているようであります。リー
・ハントや彼の仲間から歓迎され
て、彼の眼は詩の新しい王国に向っ
て開いていったのでしょう。キーツ
は彼の世界の地平線が、あらゆる期
待を越えて伸び広がっているのを感じ、ある朝スペインの探険家達がさ
がし求めたエル・ドラドの希望に満
ちて輝きつつ、彼の眼の前に広がっ
てゆくのを見たのは、とりも直さ
ず、キーツ自らの未来の無限の可能
性ではなかったでしょうか。

このソネットを書いた一八一六年
頃からキーツはクラークを通じて、
文人、画家達と親しくなり、これら
文人達のサークルにあって、彼ら一
八一七年三月、詩人シェリーの好意
で Poems by John Keats と言う
題の処女詩集を出版しました。この
処女詩集が意義ある理由は、キーツ
の詩の抱負を表明した「眠りと詩」
が載せられている点にあります。「
詩のために自己を砕く十年の歳月を
私は欲しい。そうすれば私の魂が自
らに命じた行いを達成する事ができ
るかも知れない。」

キーツは一八一七年四月に『エン
ディミオン』を書き始め、それを十
一月に仕上げ、翌年四月に第二詩集
として出版しましたが、『ブラック

ウッド・マガジン』『クォーターリー
・レビュー』から酷評されました。
『エンディミオン』には完全なる
理念を表現した完全なるカブレット
は殆んどない。キーツは理念の連想
からではなくて音の連想によって一
つの主題から他の主題へと移ってゆ
く。……つなぎ言葉を沢山使ったた
めに不完全詩行とならざるを得な
かったのである。」と。

この頃のキーツの心の中には、別
の苦しみがありました。弟のトムが
結核にかかってしまったのです。弟
はついに世を去りキーツもまた看病
中に感染してしまいました。その徴
候はトムの死後十四ヵ月目に現われ
て来ました。弟トムの死、またもう
ひとりの弟ジョージのアメリカへの
渡航、『エンディミオン』に対する
酷評等によって、キーツは深い悲し
みに沈みがちでありました。けれど
もそのキーツにもやっと一条の光が
射して来ました。この光とは、彼が
ディルク家で知り合った永遠の女性
ファニー・ブロンであったので
す。「私の心はどこへでもあなたを
求めて飛びまわり、あなたが外にぶ
らりと出かけると、私の心はわびし
くて落ちつかない。愛、愛だけが蔽
しく多くの苦痛をもっている。だか
ら恋しいひとよ、どうか苦しい嫉妬
から私を自由にしておくれ。」と歌っ
ています。

当時キーツは死に対して如何なる
考えを持っていたのであろうか。それ
は、ソネット「今宵何故私は笑った
のか」によく言い表わされておりま
す。「今夜どうして僕は笑ったのだ
らう。答える声はない。神も厳しく
返答する悪魔も、天国から或は地獄

から答へようとしてくれない。そこ
で僕は自分の心の声を聞こう。心
よ。おまえと僕は、この世で悲しく
孤りだ。どうして僕は笑ったのか。
ああ、人間の苦しみよ、暗闇よ。い
つも僕は嘆かねばならない、天国や
地獄や又心を問うのが、空しくなっ
て。どうして笑ったのか。僕はこの
仮の生命は知っている。空想が無限
に至福を掲げる事も。けれどこの真
夜中に死んでしまいたいと思う。又
世界の華やかな旗が、ぼろぼろにち
ぎれるのが見たい。詩歌と名声と美
は確かに強烈だ。けれども死はもつ
と強烈であり―死は生命の高価な報
いののだ。」

このソネットの中に「今夜何故僕
は笑ったか」が三回繰り返されてい
ますが、この笑いは冷笑的な絶望の
笑い、にがにがしさの笑いであり突
然に感情がこみ上げてきた時の笑い
である様に思われます。恐しい死の
急迫は、キーツが望んだ愛、彼が夢
みだ詩、彼がこがれた名声、彼が憧
れた美を漠然と圧迫して、彼を深み
に陥れたのでした。それがキーツ
の笑いとなって表わされたのです。
死は彼にとって詩歌、名声、美より
も強烈なものでありました。それは
生の最高の報い、生の王冠であった
ようであります。死は、彼にとって
魂の恍惚を消し去ってしまう暗闇で
はなく、すべての内で最高のエクス
タシーでありました。ワッサーマン
も説明しています様に、「強烈性の
段階が天国に至る達着点」であった
のであります。それ故にキーツはこ
の真夜中に、「心地よい死」を体験
し、世の絶えず続く苦悩から逃れた
いと願ったのでしょう。

一八一九年はキーツの短かい生涯
の中で驚異の年でありました。この
年に英文学史上不朽の名作が次から
次へと生み出されたのです。華やか
な色彩に富む「聖アグネス祭前夜」
詩的眞実の追求を描いた「情なき手
弱女」、中世的情緒に富む「聖マ
リヤに寄せるオウド」、「サイキに寄
せるオウド」、「ギリシャの古謡の
オウド」、詩圧を歌った「憂鬱のオ
ウド」、各種の要素を含んだ「怠惰のオ
ウド」、ウィンチェスターの秋を客
観的にとらえ、叙景的に描いた芸術
的に完璧な「秋に寄せるオウド」等
々であります。これらのオウドはダ
ウナーの言葉を借りますと、将に「
絶対的自然美の絶対的表現に対する
深い巧妙な本能」を示している様で
あります。

一八〇二年九月十八日、キーツは
友人であった画家のセバンを相伴
ってナポリに向けて出航し、月明り
のドウヴァー海峡を渡る船の上で彼
の白鳥の歌「輝く星よ！汝のごとく
ありたい」を書きました。この詩に
関して松浦氏の言葉を借用しますと
「キーツの薄命の一生を比類ない美
しさで浮彫にし、最後の瞬間に、死
や愛や芸術の苦悶から解き放された
詩人の精神の結晶化を示すソネット
」である様に思われます。十一月同
地に四、五日泊滞した後、ローマへ赴
き、一八二二年二月二十三日ローマ
において客死しました。

水の上にその名を留めし
者ここに眠る。
このテイラーの言葉が臨終を迎え
たキーツの慰めであります。

ひとりごと

鮑宗賢

名前のこと



すし屋に入ると、魚の名ばかりぎっしり書きこまれたでかい湯呑が出される。それをまわしながら丹念に見て行くと、鮑という

字に出くわすであろう。もちろん、すし屋のあんちゃんが威勢よく、ハイ、片思い一丁ノ、というあれである。しかし、私の姓の場合これをホウと音読する。魚介類に親類縁者がいるというわけではないが、先祖代々この苗字を使っている。

本学元助教西田保先生帰天

昭和三十七年より四十九年三月退職まで本学短期大学でラテン語を教えておられた、西田保助教は、去る四月十七日午後一時三十分、姫路聖マリア病院においてガン性腹膜炎のため帰天された。享年五十四才。故西田保助教は、カトリック司祭としての務めを忠実に果たすかわら、修道女を主とする神学科のクラスで熱心に教授に励まれていた温厚にして円満な人格の持主であった。翌四月十八日、午後二時より夙川カトリック教会で葬式がいとなわれ岸英司学長以下多くの司祭教授、修道女、信徒たちが参列し、故人の死をいたんだ。つつしんで西田保先生のご冥福をお祈りしたい。

ところが、初めてこの名を見る人は、なかなかホウと読んでくれな。字に書けばなんとか読んでもらえるとしても、声に出して言つてこの漢字を思い浮べてもらうことは不可能である。クリーニング店や、写真の現像にカメラ屋へ行つても、必ず聞きかえされる。店員は、珍奇な名に半ば狼狽し、半ば好奇の目を見はる。説明するのも面倒だから、そのような所では偽名を使うことにしている。そのほうが、相手に余計な精神的負担をかけずにすむし、こちら時間も節約できる。宗賢は、そのままソウケン、と読む。まるで、坊さんの法名みたいだが、実際、同じ名の禅僧がいる。国籍のこと 私の姓名を見れば、たいてい、国籍が中国だと想像がつくであろう。本籍は、大陸の広東省にあるが、今までは、政治的に台湾国籍であった。日中国交回復後、国籍が自動的に移動するというわけではないが、どうも、大陸側に将来性があるように思えるので、そちらのほうにより大きな興味をよせている。だからといって、いちいち転向する手続きをとる気にも今のところなれない。日本へは、祖父父母の代から移り住んでいたので、私で三代目である。国籍こそ違え、精神構造は、土台から屋根まで日本式である。否定する人もいるが、少なくとも、私自身そう思っている。

小学校のこと

それでも、幼年期と少年期の前半は、ほとんど、中国人ばかりの中で育った。遠い過去のことになるが、小学校六年生まで通った、中華同文学校では、三年生から授業はほとんど、中国語でなされていた。もちろん、使用した教科書をはじめ、掲示板、校歌、校則、標識にいたるまで、漢字で書かれていた。そこでは、日本語はもちろんのこと、中国語以外の言語を使用することは、固く禁じられ、厳しく取り締まられていた。違反する者も少なからずいたが、それらに対する懲罰も種々考案され、罰金刑の話すら出ていたが、これは実現されなかったようである。いづれにせよ、これほど厳しく制約された生活条件のもとでより快適に過ごすためには、いやがおうでも、ある程度ことばを習得しなければならなかった。

かくて、私も例にもれず、つたない日本語まじりの中国語を話すことを余儀なくされた。しかし、それきり、実際に活用し、培われる機会がなかったなげなしの知識も、長年月の風雪にさらされ、今や風化してぐずれざつた碑のごとく、わずかの残がいをかろうじて留めるにすぎない。今にして思えば、あのような抑圧的環境に身をおくことこそ、最も効果的な語学習得法であったに違いない。

先生のこと

この限られたスペースを、昔ばなしに費やすつもりではないが、ただ、当時、私が先生なる存在について抱いていたイメージをふりかえる

と、現在自分のおかれている立場が、我ながら、妙に思われて来るのである。小学校の先生といえは、整然と坐らせた生徒の前で教鞭をとり、厳しく行儀を躾け、時には、大声で生徒を叱つたりするこわい人という印象は、ある程度さけられぬものだが、それ以上に、私にとって、彼と接することは、閻魔大王の前に立たされるくらい脅威であった。まるで私の全存在をすでに手中に収め、その存続すら自由に左右できる権能を有するかのごとく、感じられたくらいである。トラか山賊のようならめき声を聞かされたことも、二度や三度ではない。もつとも、これもすべて、私の学習態度や、学校における生活秩序が原因していたことは、否めない。

最近のこと

そんな私が、自分でもまさか教師になろうなどとは、思いもよらぬことだった。突然変異が生じたわけではないが、人や環境から大いに心理的影響をこうむったことは、確かである。あの緊張した学校生活や師弟関係も、英知に入学するころには、ようやく、人間的かつ正常なレベルに辿り着いていた(と、少なくとも自分では思っている)。閻魔大王もはやいなくなつた。私が先生方と対話らしきものを経験することができたのも、大学生になってからのことである。

実のところ、私が英知大学でイスパニア語を学ぶようになったのは、全くの偶然としかいえないのだが、イスパニア語およびイスパニア世界に、強い興味をそそられた。随分し

ごかれながらも、限らない魅力に取つつかれ、意地でもこの道に進んでみようと思ふようになった。思えば随分とお世話になったものである。そんなわけで、神戸市外国語大学大学院の門をたたき、二年後、そこを無事卒業させてもらうと、念願の英知大学に戻り、およばずながら、恩師諸賢に微力をもって御恩に報いる榮譽をたまわつたわけである。

授業をうけもつたかわら、学生時代より始めたイスパニアの神秘思想、とりわけサンタ・テレサの研究にとりくんでいるが、この分野も、いざ一步を踏みこむと、眼前に広がる茫洋とした世界に、目のくらむ思いである。いかに料理していくか、目下、暗中模索の状態である。語学の教授法や、授業のやり方にしては、まだ、すべて実験段階にとどまっている。先輩の諸先生方の御教示を切に請う次第である。

(筆者はイスパニア文学科講師)

就職状況 昭和四十九年度卒業生の就職状況は、各学科とも百パーセント近くの好成績をおさめている。中企業の会社へ全体の約半分を占め、大企業へは二十三パーセントである

英知通信

昭和四十九年七月五日発行

編集 英知大学 学長広報室 発行 兵庫県尼崎市若王寺苗田

電話 (06)四九一—五〇〇八三 六六一